

‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ‘ό βίος, ὑπόληψις’

LIVE: THE COOL BEAUTY

1993.5.26
市川 CLUB G10



PHOTO BY K.K.

THE COOL BEAUTYのライブ

いくつもの小さな鐘の音と、ドーン、ドーンというタイコのような音の入った音楽がかなり長いこと流れ、前にやったバンドの印象がすっかり消えて、2月14日以来久しぶりのTHE COOL BEAUTYを静かに待つ気持ちになっていた。ベースがメンバー、エンジしたあとはじめてきくライブなので、未知のバンドをきくときの期待も持ちながら。

メンバーの3人が出てきて、ギーギーといふギターの音がきこえてきたとともに、あたりに漂っている日常性がいきなりベリベリとはがれ、深い闇になってしまった。怒濤のTHE COOL BEAUTY。あれをきくと、もう私がきいてるほとんどのロックンロールが「ガキっぽく」思えてしまうほどだ。「若いからできる」というだけの…。もちろん、ガキっぽいから下らないってことではないけど。

THE COOL BEAUTYには定住も安住もない。手が届くかもしれないって思えても、次のライブでまたはるかかなに引き離されていることに気づく。

一回一回歌詞がちがっていて、それもただちがうというのではなく、次元が変化するほどにちがい、ますます戯劇的になっていっている。

「体じゅうが碎けそうな夢からさめたら、牙をむいて空をめざせ、いまおれ前に」「傷だらけのゆがんだ声で、あやしくわらう、嵐の中で夢を見るよな光をさかす」オレの大切なガラフタ、「おまえは夢をいたぬけがら、千からびはじめたぬけがら、オレは闇の中を進む」スパイダー、スパイダー」といった凶器のような歌が、高いところから大きく重い金属の塊が落下してくるようなおそろしいスピード感と重量感のある演奏にのって疾走している。THE COOL BEAUTYはいちばん新しい。いちばん疾走している。いちばん潜行している。いちばん尖り張っている。いちばんつき離せている。きらめき光輝く闇の中で。

WORDS: 矢野 伸良子(シティーロード6月号“THE LONG INTERVIEW”より)

——音楽で泣けるというのは、感動して泣けるだけではなく、自分の心のするけたり、気づいてなくてできたりする心の歪みや傷にしめる、そういうのがあると思うんですね。痛い、みたいな感触の。矢野 ええ。芸術の役目は……何か役目があるとすれば、心を揺さぶってね、それを見ている、聴いている、というのがあると思うんですね。感動っていうのはそういうものだと思いますよね。

——ああ、そうですね。私は文章を書いてますから、そういう感動を説明するのではなく、同じように私が作る文章で次の人へ手渡したい、同じ感動を受けられるようにするにはどうしたらしいのか、と常に考えてしまします。そのため、技術のつたなさも、超えなければいけないことも山のようについて、あまりにも不確かで苦しいですけれども……。

矢野 そうね……真の評論、というものはそういうものかもしれませんね。

68号 1993.6.25

文・編集・発行
恋 怪子

LIVE: JACK KNIFE 1993.6.3 渋谷公会堂

開演までのあいだ、会場にはチケット・ペーパーの歌が静かに流れしていく、おちついたふんわり。開演は定期的にあまり遅れずにはじめた。当日券で入ったので、2階席だったが、椅子にすわっていてもステージがよく見えた。JACK KNIFEの演奏は、以前よくきいていたジャズを思い出すさせる音のハーモニーやパーカーよくひびき、安心してきていらる。

ヴォーカルの和気は、もちろんいちばん存在感があるが、目だちすぎるということがなく、他の7人のメンバーも誰か一人が目だつこともなく、バラバラでもなく、実に女子感がもてる。真食さも、きいているこちらがつくなるようなものではなくて、しなやかでさわやか。路上でのライブを重ねてきただけのことはある。やりたいことを、やりたいように、やりづけてきた実力だと思った。そして、この渋谷公会堂のライブもそのやりづけていている途中にある。一回のライブであって、渋谷公会堂をめざしてやって来たんじゃないなって感じた。

ステージで和気が「あとで路上でやるから、そこで会おう」といったとおり、渋谷公会堂のライブのあと、JACK KNIFEがいつもやっていた西武デパート横の路上でもライブをやった。大勢のファンの待つかなメンバーが到着し、バスや車が絶え間なく通り過ぎていく道路を前にして3曲やった。そして、「ワキー、ワキー」というファンの歓声を後に、和気は来たときと同じようにバイクで走り去った。人が多くてステージが見えず、音だけきていたけれども、ちゃんとした演奏で楽しかった。

5月15日アンティックにKOOL KRAZEをききにいったときと、5月26日市川 CLUB G10にTHE COOL BEAUTYをききにいったときの2回、飛び入りでJACK KNIFEが出てその演奏に好感を持ったのと、情華及誌「シティーロード」6月号にヴォーカル和気典典の文(下のコピー)が載っていて、私にはそれらがJACK KNIFEの渋谷公会堂へのゴーサインに思えて、当日券で入ることにした。

5年以前、和気が原宿の歩行者天国で3人編成でやっていたヒューズまでよくきいていた。そのうち原宿ではやらなくなつたのできかなくなつたが、ホーンを入れた6人編成になって渋谷の路上でやっていたことをあとで知った。

SCARFACEに入ったことや、今回の渋谷公会堂のチケットをチケットぴあを通じて売っていることなどを、ライブハウスで時々見られるSCARFACEの新聞や情華及誌を読んで知って、なんとなくそれ半ば白目にしていたのだが、15日と26日にライブを見てそく思わなくなった。音楽をやることに対する真食さは原宿でやっていたヒューズと変わらない感じられたし、チケットの売り方も、タダで他えまかせにしたくないということだと思つけれど、そういう意味が感じられた。

秋にメジャー・デビューをすることだが、やりたいことをやりたいようにやりづけてほしいと思う。渋谷公会堂のライブで和気が「(チケットを売るの)死にもの狂いでやった。やればでき込んだ」といったように、「やればできる」という姿勢をつらぬいてほしいと思う。



WORDS: 内田義彦(読書と社会科学、より)どうか何もせずに万事を放棄しているひまがあつたら、一事でもいい、何か踏みこんでやること。金銭的な感覚を保持し、念のため事じり屋からめる労力と軋轢(あつれき)を厭がぬ気風を養つて下さい。